

日本語の裸の後置詞に関する覚書

吉田幸治

Abstract

There can be found an interesting pattern of ellipsis in Japanese, which is quite different from the pattern observed in other European languages. The typical example is: “*Wa* ne, kaisha-o yameta-yo.”, where the utterance begins with a bare postposition *Wa* and the nominal content is deleted. This paper deals with such a phenomenon and shows that sentence-final particle and information status of unpronounced elements play an important role in order to license such an utterance. *

キーワード：bare postposition, ellipsis, optional pro drop, sentence-final particle, information status

1. はじめに

口語体においてのみ観察される現象であるが、服部（1960）は次のような興味深い事実の指摘を行っている。

- (1) ごく稀ではあるが、このような附属語に該当する発話で始まる発話の現れることがある。海外から引き揚げた或る友人と談話している時、私がいろいろの知人の消息をたずねつつ『A君は?』といったところ、彼は『はね.』(=“*Wa ne*”)と返して、しばらく音声のときれをおいて言葉を続けた。このワはホンワ、ハコワなどのワと同じ附属語である。しかし、このような例は珍しい。(服部(1960:452))

かなり限定された文脈においてのみ可能な用法であり、標準的な用法とはみなせない現象ではあるが、(1)で述べられている会話では本来の主語位置に助詞のみが残されて発話が続けられている。通常、係助詞、主格助詞、後置詞は意味と機能にもとづいて区別されることが多いが、本稿ではこうした「は」のような係助詞のみならず、主格助詞および位置や方向などを表す純然たる後置詞を含めた全てを後置詞(postposition)とみなし、後置詞のみが音声化される例を裸の後置詞(bare postposition)と呼ぶこととし、それらの振る舞いを考察する。

本稿の構成は以下の通りである。2節では過去の代表的な研究を概観する。3節では現象面の考察を行い、いくつかの特徴を示す。4節では記述的な観察を行うとともに、この現象への理解を深めるための方向性を示す。5節はまとめである。

2. 先行研究

本稿で扱う現象に関して既にいくつかの研究が存在するが、ここでは生成文法の枠組みにおける吉田 (2004), Sato (2012) の研究を概観しておくことにする。

吉田 (2004) は主題省略を扱った研究で、主題となる句全体を省略される場合と助詞の「は」だけが残される場合の差異を検討したものである。この研究では「は」のみが残される点に着目し、これを「助詞残留」と呼んでいるが、呼称はさておき、統語的に興味深い指摘を行っている。

第一に、「は」の残留現象は文頭でしか起こらないとされる。

- (2) a. \emptyset は メリーに 今日こそ 話をしなければならないね。
- b. *メリーに \emptyset は 今日こそ 話をしなければならないね。
- c. *メリーに 今日こそ \emptyset は 話をしなければならないね。

(吉田 (2004:296))

主題句全体を省略する場合とは異なり、(2b) (2c) ¹⁾ が示すように残留現象は文頭の位置でしか認められない。これは、別の言い方をすれば、助詞残留現象が生じている文に対しては、かき混ぜ (scrambling) が適用されないとはいえる。

第二に、助詞残留現象は主節現象 (root phenomenon) であるとされる。つまり (3) で示されているように、従属節では生じない現象である。

- (3) a. *ジョンは その時 [\emptyset は 天才だと] 思った。
- b. *ジョンは その時 [\emptyset は メリーが殺したと] 思った。

(吉田 (2004:297))

第三に、助詞残留現象は一つの節中で一度しか生じないとされる。

- (4) * \emptyset は \emptyset は メリーに 紹介するつもりなんですよ。

(吉田 (2004:298))

最後に、疑問文において Wh 句と共起する場合、助詞残留は Wh 句より先に生じなければならないとされる。

- (5) a. \emptyset は 何を 食べたの。
- b. \emptyset は メリーに いつ 話したの。
- (6) a. *何を \emptyset は 食べたの。
- b. *いつ \emptyset は メリーに 話したの。

(吉田 (2004:299))

これらの考察をもとに、吉田（2004）は日本語の主題句省略現象とドイツ語の主題省略なども比較することによって、助詞残留現象を左端現象（Left Edge Phenomenon）であると結論づけている。

この吉田（2004）の考察をもとに、Rizzi（2005）の主張を援用した分析がSato（2012）である。Sato（2012）はドイツ語の主題省略に加えて、「から」などの純然たる後置詞句に後続する「は」の残留現象も考察したうえで、近年のフェイズ理論に基づく次のような結論を主張している。

- (7) ...stranding of the noncontrastive topic marker *-wa* arises when the Top phase head is optionally spelled out to PF, together with its TP complement, for phonetic interpretation at PF whereas the entire syntactic structure including the topic is transferred to LF for semantic interpretation. (Sato (2012:502))

Sato（2012）では、Rizzi（2005）による“the Privilege-of-the-Root Phenomenon”²⁾という概念をもとに、Kayne（1994）、Whitman（1997）に従い、日本語の「は」が主要部であるとみなし、TopPを成すものと考えている。そして、このTop phase headである「は」のみが随意的（optional）にPFに送られ、「は」に先行する要素を含む全体がLFに送られるという分析を提示している。

この分析は現行のフェイズ理論を援用することで現象を捉えることに成功しているが、問題がないわけではない。大きな問題として、Kayne（1994）に端を発すると思われる「は」「が」などを文の主要部とみなす分析が正しいかどうかという問題がある。ごく一部であるとはいえ、附属語を文の主要部であると断定してしまうことは、理論全体に及ぼす影響が大きく、慎重にならざるを得ないと思われる。

また、Sato（2012）が提示している分析は、関連する現象のなかでも理論に合致しやすいと思われるごく僅かな部分に対してのみ行われているものであり、カートグラフィー分析に対してしばしば述べられることがある、「現象に対してうまく分析をあてはめているだけの記述に過ぎない」という批判が解消されないように思われる。

3. 注意すべき特徴

ここでもう一度基本に立ち戻って、裸の後置詞にみられる現象を記述的に考察して、特に現象面での際立った特徴を指摘しておきたい。

まず、吉田（2004）、Sato（2012）ではほとんど議論されていないことであるが、裸の後置詞がどのような文脈で現れるのかという問題について考えておく必要がある。実は、そもそも裸の後置詞で始まる文が単独で現れることはないのである。次の諸例から考察してみよう³⁾。

- (8) A: あその中華料理はおいしかったね。特に餃子がねえ。
B: Øは、おいしかったですね。
- (9) A: 同窓生の多くは元気に過ごしているようだね。で、山田君は？
B: Øはね、みんな消息を知らないらしいよ。

(10) A: ところで君は知っているか。木村が選挙に出るらしいよ。

B: Ø が 出るの？

(8) から明らかなように、裸の後置詞は先行発話の一部を繰り返すことが多い。これは次の (11) のように、いわゆる pro drop と考えられる、主題句全体を省略した場合にも観察される。

(11) A: あそこの中華料理はおいしかったね。特に餃子がねえ。

B: Ø おいしかったですね。

(9) から明らかなことは、裸の後置詞の直後にいわゆる終助詞が後続可能であるということである。微妙な意味の差異が生じるが、(9) において「Ø はね」を「Ø はさ」、「Ø はよ」としても容認性は変化しないように思われる。

(10) では「が」が残留している。先行発話においても「木村が」と「が」が用いられている点に注意したい。

さらに、(8) (9) においては終助詞の「ね」と「よ」が用いられており、(10) においては裸の後置詞を含む文が疑問文となっている。

以下ではこうした特徴を含めてもう少し詳しく考察していくことにする。

4. 記述的考察

4.1. 裸の終助詞は談話の冒頭では不可能である

まず、裸の後置詞は談話の冒頭では不可能であるかどうかという問題を考察してみたい。筆者が小説・新聞などのコーパスを調査したところ、「は」「が」「も」に関しては実例を発見することはできなかった。例外として (12) のような、接続機能を担う「で」があるが、これは特殊な例であるし、場面やそれ以前の会話が影響していると考えられるので、裸の後置詞とは別物であるとみなすべきであろう。

(12) a. で、用件は何ですか。

b. で、話というのは何かね。

4.2. 逆接の「が」

(10) で「は」ではなく「が」が裸の後置詞として現れる例を示したが、これに関しては少し注意が必要である。主格助詞の残留とみなすことができない例も存在するからである。(13) をみられたい。

(13) A: あのレストランの料理、見た目はかなり奇妙だったね。

B: が、おいしいのですよ。

この場合、実は「が」は2通りに曖昧である。「それが」という解釈と「でも」という解釈である。前者はいわゆる総記の「が」に類するものであり、後者は逆接の「が」である。後者の場合には、小説などにおいて一人称の語りでも散見されるものであり、本稿の考察とは異なるものと考えられる。

(14) 明日は家族でハイキングに行く予定だった。が、天気予報では雨ということであった。

したがって、(13)におけるBの発話は逆接の接続詞「が」の後に「それが」を伴った次の(13)のように発話することも可能である。

(13) A: あのレストランの料理、見た目はかなり奇妙だったね。
B: が、それがおいしいですよ。

4.3. 終助詞を伴うのはなぜか

吉田（2004）およびSato（2012）が提示している例文からも明らかなように、裸の後置詞を含む発話には終助詞を伴うことが多い。もちろん、終助詞を伴わない例も多数存在するが、多くの場合には終助詞を伴っていると座りが良くなる。これはなぜだろうか。

この問題はそれほど複雑なものではなく、終助詞一般にみられる情報の帰属性に関する話者の判断に関わる問題とみなすことができる。

神尾（1990）、田窪（1990）が詳細に論じているように、日本語ではある発話に含まれる情報が話し手に属するものであるのか聞き手に属するものであるかによって、どちらが導入した情報であるのかにもとづいて言語形式が影響される。もっとも具体的で明確に情報の帰属性を示す部分が終助詞の「ね」「よ」「さ」である。

つまり、終助詞が多用されるのは、3節で述べたように、裸の後置詞は先行発話が存在することによって成立するものであり、情報が完全に共有されているものとはみなせないからである。

興味深いことに、次の例のように、いわゆる「詠嘆の助詞」の「な」を伴うことが多いという点も注目しておいてよいであろう。

(14) 政治評論家に対するインタビュー。Aが記者、Bが政治評論家
A: 今回の政治再編によって山は動くでしょうか。
B: Øは、動かんでしょうな。

「な」が発話されなくても容認可能であるが、立場が上の者という文脈であれば「な」を伴う方が自然であるように感じられる。この点でもやはり情報の帰属性が関連していることは明らかであろう。

4.4. 性質の異なる現象

関連する興味深い現象として、いわゆるとり立て詞のみが残留する場合がある。

(15) 風邪を引いて寝込んでいる子供を話題として。

A: おかゆぐらいは食べたんだろ。

B: Ø さえ 食べないのよ。

(16) 友人を話題にして。

A: 田舎に帰るってさ。

B: Ø しか 言ってなかった？

(17) 借金の返済に関して。

A: とりあえず利息だけでも返済しておけば問題ないと思うけど。

B: Ø だけで 済むかしら。

(17) で「で」が加えられている点はさておき、(15)-(17) ではとり立て詞から後続発話が始まされている。とり立て詞は、古文における係り結びのように、文中の他の要素によって認可されると考えられている⁴⁾。それぞれ(15)では「ない」が「さえ」を、(16)では「た」が「しか」を、(17)では「で」が「だけ」を認可していると考えられる。では、とり立てられている要素はなぜ省略されているのであろうか。

(15)-(17) の例で省略されていると考えられる要素を復元してみると、いずれも Ø で示されている部分には「それ」があったものと想定するのが自然なようである。つまり、指示詞の「それ」である。実は、興味深いことに、裸の後置詞が現れているばあい、その Ø となっている部分にはコソア系列の代名詞類が復元できることが明らかである。(8)-(10) を例として部分的に変更したものを示すと(18)-(20) のようになる。

(18) A: あそこの中華料理はおいしかったね。特に餃子がねえ。

B: あれは、おいしかったですね。

(19) A: 同窓生の多くは元気に過ごしているようだね。で、山田君は？

B: あいつはね、みんな消息を知らないらしいよ。

(20) A: ところで君は知っているか。木村が選挙に出るらしいよ。

B: あいつが 出るの？

いずれの場合も指示対象が話し手と聞き手から離れたものとして認識されるため、ア系列の表現となっているが、話題の対象が聞き手または話し手に近いものであればソ系列、コ系列が用いられる場合もある。

こうした考察から推察できることは、「指示詞+後置詞」の連続体は後続発話においては後置詞のみを残した発話が可能であるということである。つまり、その指示対象に関しては文脈内における既知情報でなければならないということである。

もちろん、4.3節でみたように、情報の帰属性によって言語形式には変化が生じるが、発音されない部分はコソアで始まる代名詞類に置き換え可能なものである。

以上の考察をまとめると以下のことが言える。

- (21) a. 裸の後置詞は談話の冒頭では現れない。
- b. 裸の後置詞は「は」に限られるものではなく、「が」またはとり立て詞などが残留する場合もある。
- c. 情報の帰属性に左右されやすい現象であるため、形式を整えるために文末助詞を伴うことが多い。

5. 結語

本稿では「助詞残留」として論じられてきた現象を、他の後置詞を含めて記述的に考察した。3節と4節でも述べたように、この現象は先行発話が存在することによって成立するものであり、単独の発話として考察するだけでは不十分である。

かつて Quirk (1982: 121-132) は “beginnings do not exist: we have only continuations” と述べ、ゼロ地点からの発話というものは存在せず、全ての発話は何らかの形で何かを引き継いでいるものであるとした⁵⁾。

児玉 (2013) は従来の語・文レベルの局所的な言語分析ばかりではなく、言説も含めた分析対象の拡大を提唱している。裸の後置詞の現象も文レベルの考察だけでは全体を捉えられるのではなく、談話を含めた考察が不可欠である。

また、本稿では触れることができなかったが、大規模コーパスを用いた調査も不可欠であり、時系列に沿った考察も重要であろう^{6), 7)}。いずれも今後の課題である。

注

* 本稿は故児玉徳美先生に捧げるものである。以下、児玉先生との個人的な交わりについて略述させていただくことをお許し願いたい。筆者が児玉先生存在を知ったのは1987年の盛夏の頃であった。拙宅の近所にある公立図書館の書架に新刊として置かれていた『依存文法の研究』を何気なく手にした折、奥付に書かれている略歴欄を読んで、「こんな研究をされている先輩もいるんだ。」と思ったのが先生存在を意識するきっかけとなった。その後、1991年に六甲英語学研究会においてお姿を拝見する機会に恵まれ、1994年には立命館大学大学院文学研究科博士後期課程において指導していただける僥倖を得た。その後、直接的・間接的に様々なご指導をさせていただいたが、児玉先生から受けたご指導のなかでもっとも強く筆者が影響を受けているのは「言語研究は自由であるべきだ。」という点である。これは、学術的に妥当な手法を用いている限りにおいて、言語の研究は様々な角度から自由に行われるべきであるということであり、決して出鱈目な研究を認めるというものではない。筆者自身がしばしばある種の窮屈さを感じるがあった言語研究をまがりなりにも続けてこられたのは、児玉先生のこうした自由な学風と独自の発想法から受けた影響のおかげである。改めて生前のご指導に感謝するとともに、ご冥福をお祈りしたいと思う。

本稿は2014年12月27日に行われた六甲英語学研究会例会（於六甲勤労市民センター）において口頭発表したものの一部に大幅な加筆・修正を行ったものである。この場を借りて発表当日に貴重な意見あるいは質問をしていただいた諸氏に感謝したい。本研究は、平成27-29年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））（課題番号：15K02771, 研究代表者：吉田幸治）の援助を受けてなされた研究の一部である。

- 1) もちろん、(2c)の「は」を「今日こそ」に接続するものとして休止を置かずに発音すれば容認可能

となるが、その場合は「今日こそ」を主題とする句になるので、基体となる文とは別物である。

- 2) Rizzi (2005) によれば、フェイズの最上位に位置する指定部は spell out される必要がなく、発音もされないとのことである。
- 3) 以下出典を明記していない例文は筆者による作例であり、容認性の判断も筆者による。
- 4) とり立て詞の考察に関しては佐野 (2009) およびそこで挙げられている文献を参照されたい。
- 5) このような視点にもとづく考察に関しては Bazerman (2004) を参照されたい。
- 6) 六甲英語学研究会において、数名の方から「助詞だけが残る発話は古い感じがする」との意見を頂戴した。しかし、吉田 (2004: 293) は「このタイプの主題省略は、最近頻繁に耳にするようになったものであるが」と述べており、筆者もこうした発話は増加傾向にあるように感じている。
- 7) 本稿では意図的に扱わなかったが、次のような例も存在する。
 - (i) A: 人事部の原田君は北海道の出身だったよね。
B: Ø から 来たのではないそうですよ。この例では「北海道」が省略されていると考えられるが、同様に「へ」や「まで」だけが残留する例も多く、改めて考察する必要がある。

参考文献

- Ball, A. F. and Freedman, S. W. (eds.) (2004). *Bakhtinian Perspectives on Language, Literacy, and Learning*. Cambridge University Press.
- Bazerman, C. (2004). "Intertextualities," In A. F. Ball and S. W. Freedman (2004), pp. 53-65.
- 服部四郎. (1960). 『言語学の方法』. 岩波書店.
- 神尾昭雄. (1990). 『情報のなわ張り理論』. 大修館書店.
- Kayne, R. (1994). *The Antisymmetry of Syntax*. MIT Press.
- 児玉徳美. (2013). 『ことばと意味』. 開拓社.
- Quirk, R. (1982). *Style and Communication in the English Language*. Arnold.
- Rizzi, L. (2005). "Phase Theory and the Privilege of the Root," In *Organizing Grammar: Linguistic Studies in Honor of Henk van Riemsdijk*, ed. by H. Broekhuis, N. Corver, R. Huybregts, U. Kleinhenz, and J. Koster, pp. 529-537. Mouton de Gruyter.
- 佐野まさき. (2009). 「完全移動と部分移動－とり立て詞からの事例研究－」『立命館言語文化研究』21巻2号. pp. 191-216.
- Sato, Y. (2012). "Particle-Stranding Ellipsis in Japanese, Phase Theory, and the Privilege of the Root," *Linguistic Inquiry* Vol. 43, No. 3, pp. 495-504.
- 田窪行則. (1990). 「対話における知識管理について－対話モデルからみた日本語の特性－」. 崎山理・佐藤昭裕 (編). 『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂. pp. 837-845.
- 吉田智之. (2004). 「主語の省略現象－比較統語論的考察－」『日本語教育の視点－国際基督教大学大学教授 飛田良文博士退任記念－』東京堂出版. pp. 291-305.
- Whitman, J. (1997). "Kayne: p. 143, fn. 3." In *The Minimalist Parameter*, ed. by Galina Alexandrova and Olga Artunova, pp. 77-100. John Benjamins.